慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

| | |
|---|---|
| Title | フランス・ファシズムの源流：<br>「セルクル・プルードン」の形成を中心として (二・完) |
| Sub Title | The origin of Fascist Movements in France (2. End) |
| Author | 深沢, 民司(Fukasawa, Tamiji) |
| Publisher | 慶應義塾大学法学研究会 |
| Publication year | 1985 |
| Jtitle | 法學研究：法律・政治・社会 (Journal of law, politics, and sociology). Vol.58, No.4 (1985. 4) ,p.33- 55 |
| JaLC DOI | |
| Abstract | |
| Notes | 論説 |
| Genre | Journal Article |
| URL | https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00224504-19850428-0033 |

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

# フランス・ファシズムの源流（二・完）

## ――「セルクル・プルードン」の形成を中心として――

深沢民司

はじめに
第一章　アクション・フランセーズの教義
　第一節　シャルル・モーラスの思想
　第二節　ラ・トゥール・ドゥ・パンのコーポラティズム論
第二章　アクション・フランセーズの「第二世代」の抬頭
　第一節　「第二世代」の理念と精神
　第二節　ジョルジュ・ソレルのナショナリズム思想
　第三節　ジョルジュ・ヴァロワの思想形成……（以上前号）
第三章　セルクル・プルードンの設立とその思想……（以下本号）
　第一節　セルクル・プルードンの設立
　第二節　セルクル・プルードンの思想
むすびにかえて

# 第三章　セルクル・プルードンの設立とその思想

## 第一節　セルクル・プルードンの設立

『批判誌』におけるアンケートの後、ヴァロワは新学派のなかに自分の理念を展開するための仲間をみいだし、ソレルとかれの若い弟子であるエドゥアール・ベルト(1)(Edouard Berth)に急速に接近した。他方、ソレルは一九〇八年の秋に、それまで依拠していた『ル・ムヴマン・ソシアリスト』が民主主義化したことに不満を覚えてそれと絶交し、ベルトも翌年の一月にそれに倣った。さきに述べたように、ソレルはこの頃からアクション・フランセーズに強い関心をもつようになるとともに、かれの新しい考えを表現し、右翼と左翼の反民主主義者が合同する機会をもとめていた。実際、ソレルは『批判誌』の若者の要請を断りきれずに、一九〇九年八月に『ラクション・フランセーズ』に論文を載せ、九月にはインタビューに応じた(2)。とはいえ、ソレルは公的に君主主義者と共同することには、依然強い不安をもっていた。このような経緯の後、一九一〇年の夏にヴァロワはベルトと一緒に新しい雑誌をつくることを決め、すぐにソレルに参加をたのんだ。ヴァロワはソレルの不安を解くために、編集委員会が君主主義者によって占められることはないとソレルに伝えた。ソレルはベルトを評論家にしたいという希望もあって、ヴァロアの申し出を受諾した(3)。新しい雑誌は『シテ・フランセーズ Cité française』と名づけられ、一九一〇年一月一日に創刊号を出すことになった。編集委員会を構成したのは、ベルト、ソレル、ヴァリオ、ピエール・ジルベール(Pierre Gilbert)、ヴァロワであり、このうち君主主義者はヴァロワと『批判誌』の編集者であったジルベールだけであった。

『シテ・フランセーズ』の発刊趣意書に含まれる宣言文は、次のような文句で始まっていた。「この雑誌の設立者は、

フランス国の自由な組織化に参加するために団結している。組織化の仕事は、今日、前世紀にフランスで流布していたイデオロギーによって妨げられ、しばしば不可能にされている[4]。この文のなかに、後の「セルクル・プルードン」までもちこされる、ナショナリズム－サンディカリズム合同の基本理念をみてとることができる。ここで述べられているイデオロギーとはデモクラシーのことである。宣言文では、民主主義理念を正当化する科学、労働者階級を愚鈍にする経済体系、歴史をデモクラシーの形成過程と捉える歴史家、文学的アナーキストを告発し、「フランスの知性」をこのイデオロギーから解放することが『シテ・フランセーズ』の第一の仕事だとされている[5]。次の仕事は「フランス国の自由な組織化」である。「フランス国 cité française」とは、フランスの文明ないし伝統に基づくフランス社会のことであり、「自由な組織化」とは、現在における合理的な方向づけのことである。したがって、この仕事は伝統的なフランス社会を合理的に再建することである。

『シテ・フランセーズ』は出版されなかった。ソレルは寄稿者の凡庸な質と出版社について当初から不満であったし、また自分の名前が代表者のなかに出ることも欲しなかった。かれはベルトのために一年だけその雑誌に寄稿するつもりであった。もっと重大なことは、ヴァロワがヴァリオと仲たがいし、かれを編集委員会から追い払おうとしたことである。ヴァリオは自分がやめることで問題を解決しようとしたが、ソレルは編集委員会で君主主義者が多数派になることを恐れ、このことに同意しなかった。ソレルはヴァロワを責めながら去って行き、出版は中止になった[6]。

『シテ・フランセーズ』の理念は、出版の中止によって立ち消えになったわけではない。すぐにヴァリオは金を用意して、ソレルに都合のよい雑誌をつくることを提案した。ソレルは少したってヴァリオの提案を受け入れ、『ランデパンダンス L'Indépendance』という雑誌名を選んだ。ヴァリオはベルトにも参加することを申し入れたが、ベルトはヴァロワに惹かれていたので応じなかった[7]。この雑誌は一九一一年三月一日に創刊号を出し、その後一九一三年の終りまで全部で四八巻を出版した。宣言文には、『ランデパンダンス』は政党や文学集団の道具になるつもりはなく、

それがめざすのはギリシアとローマの古典的伝統を継承し、豊かにすることであると明記されている。[8] ソレルは、基本的に、政治的問題よりも文学や芸術を研究対象にするつもりであった。寄稿者のほとんどは右翼の文学者であり、それも当時かなり高い名声を博していた人物ばかりであった。アクション・フランセーズの人間も多数寄稿していたが、ソレルはイデオロギーに縛られずに、ナショナリズムの見地から幅広くフランスの伝統を再興することを意図していた。

他方、ヴァロワは『シテ・フランセーズ』を企てた頃から、『批判誌』の内部で指導者のリヴァンと対立するようになる。その理由は、ヴァロワがソレルに近づきすぎて、アクション・フランセーズのコーポラティズム論を代弁するラ・トゥールに、あまり注意を払わないことにあった。[9] この対立が顕在化し、ヴァロワが自由に意見を述べられなくなっていた一九一一年五月、『批判誌』に参加していたカムュロであるアンリ・ラグランジュ（Henri Lagrange）がヴァロワに接近し、経済を研究するナショナリストのサークルの設立を促した。[10] ラグランジュは「社会君主政」の問題はほとんど解決されていないと考えていた。二人は新しいサークルの企画を始め、一九一一年の夏の間に、そのサークルはナショナリストと反民主主義的な左翼に共通したものになることが決まった。ヴァロワはすぐにベルトをさそい、快諾をえた。かくして一九一一年一二月六日に「セルクル・プルードン Cercle Proudhon」（以下「セルクル」と略）は最初の会合をもち、その後規則的に毎週会合を開いた。そして翌年の一月から『カイエ・ドゥ・セルクル・プルードン Chaiers du Cercle Proudhon』（以下『カイエ』と略）の刊行が始まり、それは第一次世界大戦の開始される一九一四年まで続いた。セルクルはその構成人員が二〇～三〇人、雑誌の定期購読者数が二〇〇人程度という、きわめて小規模な集団であった。[11] しかしながら、セルクルはフランスの右翼からファシズムへの思想史において重大な意義をもっている。

宣言文に、セルクルにいるのは「多様な起源、相異なる条件をもった人間」であり、かれらは「共通した政治的願

望をもたずに、自由に意見を述べるだろう」とあるように、[12] セルクルは最初は開かれた研究集団を意図していた。しかしながら、宣言文に署名した八人のうち五人がアクション・フランセーズに入っており、また他の成員の多くもアクション・フランセーズ研究所の学生であった。しかも、非君主主義者のほとんどはすぐに君主主義に転向していた。このような事情、ならびにセルクルにおける活発な議論とそこからうまれた諸論文の内容を考え合わせると、セルクルの思想を一括して論じてよいと思われる。

セルクルの研究目標について、宣言文には「全員が等しく熱中しているのは、プルードンの作品と現代のサンディカリズム運動のなかにかれらが再発見するところの、フランスの伝統から借り受けた原則に従って、フランス国を組織化することである」[13]と述べられている。いうまでもなく、これは『シテ・フランセーズ』におけるナショナリズムとサンディカリズムの結合という理念の踏襲である。ただし、セルクルにおいては、君主主義的ナショナリズムとサンディカリズムの結合といいかえることができる。ここでめざされているのは、一方を他方に組み入れることでもなければ、単に両者をはめ絵のように組み合わせることでもなく、ナショナリズムの立場からする社会改革のために両者を「合成」することである。セルクルの存在を重大ならしめているのは、この合成が既成の有力な政治理念を越えでたこと、少なくともその可能性をもっていたことである。

(1) Pierre Andrew, Bibliographie d'Edouard Berth, *Bulletin of the International Institute for Social History*, n° 7-8, 1952-1953; J. Variot, *op. cit.*, p. 162.

(2) G. Sorel, Socialistes antiparlementaires, *L'Action française*, 22 août 1909.

(3) Jules Levey. The Sorelian Syndicalists: Edouard Berth, Georges Valois, and Hubert Lagardelle, Ph. D. dissertation, Columbia University, 1967, pp. 131-133; G. Valois, *D'un siècle à l'autre*, cit., p. 256.

(4) Déclaration de la《Cité française》, in Pierre Andrew, *Notre Maître: M. Sorel*, Bernard Grasset, 1953, p. 327.

(5) *Ibid.*, p. 328.

(6) J. Levey, *op. cit.*, pp. 134-136.

(7) J. Variot, *op. cit.*, p. 262.『ランデパンダンス』の最初の編集委員会を構成したのは以下のメンバーである。Émile Baumann, René Benjamin, Vincent d'Indy, Paul Jamot, Ernest Lauret, Émile Moselly, Georges Sorel, Jérôm et Jean Tharaud, Jean Variot.

(8) Manifest de l'《Indépendance》, in P. Andrew, *Notre Maître*, cit., p. 332.

(9) P. Mazgaj, *op. cit.*, p. 171-172.

(10) G. Valois, Notre première année, *Cahiers du Cercle Proudhon*, n° 3-4, 1912, p. 157.

(11) P. Mazgaj, *op. cit.*, p. 178.

(12) Déclaration, *Cahiers du Cercle Proudhon*, n° 1, 1912, p. 1. 宣言者名は以下のとおりである。Jean Darville, Henri Lagrange, Gilbert Maire, René de Marans, André Pascalon, Marius Riquier, Georges Valois, Albert Vincent. なお、Jean Darville とはEdouard Berth がソレルのすすめで使ったペンネームである。

(13) *Ibid.*

## 第二節　セルクル・プルードンの思想

本節では、セルクルの理念の核心であるナショナリズムとサンディカリズムの合成にみられる思想を検討するが、順序としては序文で示したファシズム思想の指標の順で行なう。最初に、㈠セルクルのナショナリズム思想を検討する。次に、セルクルの反デモクラシーの思想を考察するが、アンリ・ラグランジュ (Henri Lagrange) が要約したように、[1] セルクルにおけるデモクラシー批判は「反リアリズム」と「資本主義体制」という二つの論点を中心としている。そこで㈡反リアリズム論、㈢資本主義体制論、に分けて考えてみたい。次に、セルクルにおける㈣国民社会主義の理念、㈤暴動主義的思想、の検討を行なう。最後に、㈥セルクルの思想の意義をモーラス的保守主義との関連でまとめておきたい。

(一)、セルクルにおけるナショナリズムは、基本的にアクション・フランセーズと変わるところはない。フランス国民の伝統を確定し、愛国主義の感情を基礎として成立するその伝統への自己同一化のなかで、疑似宗教的に感じとられる伝統的諸力から生きる力をえようとすること、そして伝統によって規定された国民の維持を唯一の目的とみなすことにおいて、セルクルとモーラスは軌を一にする。しかし、セルクルがナショナリズムの原動力としたフランスの国民的伝統は、モーラスの場合とやや異なる。この差異を、なぜセルクルはプルードンを引き合いに出したか、という問題を手がかりにして考察したい。

セルクルがプルードンを援用する理由のひとつは、容易に察しがつくように、ナショナリストとサンディカリストの同盟のために、双方の運動家に評価されている人物をセルクルの出発的におく必要があったことである。だがプルードンの援用には、より積極的な理由があったと思われる。次のピエール・ガラン (Pierre Galland) の言は、セルクルのプルードン研究にたいする基本姿勢を示している。

「われわれは、プルードンの作品を全面的かつ排他的に利用しようとは、決して考えていない。……われわれがわが国の再構築のために、プルードンがひじょうに豊かにもたらした素材を利用する場合、かれを尊敬するからといって、かれが示したに違いない方向でかれの思想を完成させたり、あるいはより正確にいって延長することが、われわれに禁じられるわけではない。」(2)

この文章から理解できるように、セルクルはプルードンの客観的な研究を意図してはいない。セルクルはただ、プルードンのもたらす「素材」を利用して「国の再構築」を実現しようとするにすぎない。ではその「素材」とは何か。それについてベルトは、「プルードンはフランスの社会主義であり、フランスの国民的伝統であり、一八七〇年以来のドイツの支配、とくにマルクス主義の支配によって没収されたフランスの資質である」(3)と述べる。つまり「素材」とは、デモクラシーによって損なわれていない「真の社会主義」と、右翼が継承したナショナリズムである。この場

合、プルードンのナショナリズムと社会主義は、具体的な内容をもつものとしての「素材」というよりは、むしろ方向性と最低限の内容を示しながら、「フランスの二つの伝統」[4]のもつ力を表象する観念としての「素材」である。プルードンはこのような意味で、伝統を体現する人間として象徴化されているのであり、だからガランは「プルードンには『フランスの理論』が欠けている」[5]と平然ということができた。セルクルはプルードンを援用して伝統にたちかえることにより、ナショナリズムとサンディカリズムの合成という理念を正当化し、同時に、その時代のナショナリズム運動を代表するアクション・フランセーズの拘束を逃れて、自由に理論を展開するための基盤を獲得しようとしたのである。

では、なぜ新しい基盤を必要としたのであろうか。それは、セルクルのナショナリズムが、それ以前の右翼ナショナリズムと意味内容を異にしたからである。セルクルにおけるプルードンの象徴化は、右翼の担ってきたナショナリズムと左翼の担ってきた社会主義をフランスの伝統に定め、双方のエネルギーを総合しようとする意志のあらわれである。したがって、セルクルのナショナリズムは、伝統の理念のみならず伝統的諸力の感受においても社会主義と合体している。それにたいして、リヴァンらの『批判誌』グループが左翼に接近したとしても、その意図は、労働者のもつ社会主義的なエネルギーを右翼のナショナリズムに引き入れることだけにあり、基本的に、かれらはモーラスの完全ナショナリズムをそっくり受け継いでいた。

㈡、ベルトはサンディカリストの時代から、ソレルに倣って反デモクラシーを標榜していたが、かれの関心は主に哲学的批判にあった。ベルトによれば、デモクラシーは「唯名論的、主観主義的、個人主義的、原子論的」であり、要するに反集合的である。実質的な実在（レアリテ）を形成するのは、家族・職業・地域・教会・国民といった有機的集合体であって個人ではない。これらの集合体は「血、伝統、個人外的で超合理的な力」に基づく「神秘的な実在」であり、個

人の同意に依拠することはない普遍性をもつ。個人はこうした集合的諸力にしつけられることによって、はじめて動物的水準から救い出され、人格をもつことができる。しかしデモクラシーの「抽象的合理主義」は、個人という「虚構」を社会の基礎におくことで真の存在を否定し、世界のすべてのものを抽象化する。また理念にかんしても、民主主義者は形而上学を憎み、「現世欲の一形態」にすぎない理想だけを信じる。デモクラシーは「天使を造ろうとして獣を造った」とベルトは論じた。(6)

この種のリアリズムは目新しいものではないが、ベルトはこのような文脈から、同一のリアリズムの精神に貫かれたナショナリストとサンディカリストは同盟できると主張する。すなわち、ナショナリストは領土による拘束を受け入れ、領土的実在とみなされる祖国についてのリアリズムに依拠し、他方、サンディカリストは生産による拘束を受け入れ、組織的ないし専門職業的実在とみなされる労働についてのリアリズムに依拠する、と。(7) このようなリアリズムの精神は、セルクルの理念としては、国民とその内部の諸集団に固有の存在様式と機能の維持、およびそれらの集団の有機的連関の維持という主張になる。自律した媒介集団が多元的構成をとる国家において、はじめて個人と国民のエネルギーが保守できるというわけである。基本理念としてはフランスの右翼の分権主義と同じである。さらに、セルクルのリアリズムの精神は「強制の体制としての文明」という理念にもあらわれる。

ベルトはサンディカリストであった時代から、社会主義は資本主義と同様に「生産という絶対的命令」に従うこと、文明は資本主義の特性である強制と規律のヒエラルヒー的体系を通して形成されたことを認めていた。(8) もちろんかれはサンディカリストとして、あるいはマルクス主義を受け継ぐ革命的社会主義者として、完全な服従を要求する受動的な規律から義務感に基づく自発的な規律へ、主人の権威と命令が支配する仕事場から主人なき仕事場へ、要するに強制の体制から自由の体制へ移行できること、そうすべきであることを主張していた。だが、この移行が可能であるのは、資本主義が物質的豊かさや技術的進歩をもたらしたからであり、それ以上に、資本主義の「鉄の規律」がひき

だした道徳的進化によって、人間が原初的怠惰を克服して自己規律できるようになったからである、とベルトは明確に認識していた。つまり、労働者は自由な結社の感覚、率先の精神、責任感をもつことにより、生産集団を自発的に構成して、「後見や監督を必要とせずに資本主義の作業を続けることができる」というわけである。さらにベルトは、この移行が完全に達成されるとは考えていなかった。かれは「サンディカリズムはたんに、資本主義的な経済進化の宿命的な過程に自発的な過程を付け加えるだけである」と述べる。ベルトはソレルと同様に、道徳的発展という見地から、社会主義社会の実現よりも、それをめざす資本主義との闘争にサンディカリズムの意義をみつけていた。

以上のように、ベルトはサンディカリストのときから「サンディカリズムは資本主義の正当な子供である」として、それを資本主義の「強制体制」の発展形態と考えていた。この立場からすれば、ベルトがアナーキズムに激しく敵対していたことはもっともなことである。というのも、ベルトの擁護するサンディカリズムは「アナーキズムの否定する自由の社会的性格」をもつのに、当時のサンディカリズム運動には、アナーキズムの要素がかなり流れ込んでいたからである。ベルトによれば「アナーキズムは強制の体制にたいする永久的抗議であり、……文明をたえず恨み、……労働規律に従わせようとする鉄の体制に反抗し、放浪や原初的自由を懐しむ」。要するに、アナーキズムの根本的な誤りは「無邪気で牧歌的な楽観主義、人間の善良な本能への無邪気な信頼」である。(9)

セルクルにおいて、ヴァロワが「サンディカリズム的アナーキズムはデモクラシーによって説明される」(10)と述べるように、アナーキズムはデモクラシーの一形態と促えられた。こうしてベルトなどの新学派のアナーキズム批判は、デモクラシーの根源的批判、ヴァロワの言葉では「形而上学的」批判というかたちで展開された。この批判のなかで、あらゆる種類のデモクラシーを基礎づけるのは、楽観主義的な「進歩観」であるとされた。その教条とは、人間は無限に道徳的完成にむかい、その過程において獣性を抑圧するための強制の制度は次々に取り除かれ、最終的な完成段階ではアナーキーな社会になる、というものである。(11)根本的にセルクルのリアリズムの精神に反するのは、このよう

な啓蒙思想である。ヴァロワはこの一八世紀の「進歩の信仰」に、一七世紀のキリスト教的な悲観主義に彩られた「現実主義的認識」、ないしは次のような「世界認識」を対置する。すなわち、「人間は原罪の諸結果を被っていること、あるいはその本性の不完全性によって制限されていることを示し、そして、人間がかれの救いと現世におけるかれの最大の善をみいだす秩序のなかに人間社会を維持するところの、政治的・社会的制度を基礎づける、科学的であると同時に宗教的な世界認識」[12]である。以上のような批判において、自由にむかう進化は完全に否定される。もちろんベルトにしても、現実のサンディカリズム運動の民主主義化に失望してナショナリストになってからは、「自由の体制への移行」という理念を完全に捨て去っていた。

㈢、セルクルは資本主義を攻撃したが、この攻撃は資本主義的な生産様式にたいしてではない。資本主義のメカニズム自体は生産の自明の前提とされる。セルクルが攻撃の対象としたのは、資本主義的原則が企業の経済という制限を逸脱し、政治的・社会的領域に侵入して「国民内部の人間関係」を決定することである。資本主義的原則とは、資本に最高度の生産性を保証するための自由放任の原則のことである。この原則に社会全体が支配される体制が「資本主義体制」とよばれる。[13]ヴァロワによれば、このような体制において、「企業の長は、かれらの自然なエゴイズムと同じほどその原則の力によって、国益という優越的利益のために資本の生産性と土地利用の直接的可能性を制限するところの、あらゆる制度を破壊するように導かれる」[14]のであり、そして企業の長ばかりか、政治家や一般民衆までもが私利の追求だけに没頭し、金の力に依存する「金権政治」を行なう。セルクルでは「資本主義体制」と「金権体制」はほぼ同じ意味で使われており、そしてそれの最たる害悪は国益を損なうことであった。

ヴァロワは「資本主義体制」にはまりこんだブルジョワの責任をとくに重くみる。すなわち、かつてのフランスのブルジョワは、その本来的機能である生産と交易の組織化を十全にはたし、一定の公共行政を引き受けるとともにそ

れに物質的手段を提供し、軍務につき、そして貴族階級を財政的に援助してその連続性を保証した。かれらは、国民の内部におけるその階級に固有の立場と機能をはっきりと自覚し、階級の誇りと名誉感をもっていた。ヴァロワは、これは「驚くべき秩序」だと述べる。ところが、大革命によってこの秩序を支えていた政治的・社会的枠組みが壊されると、かつてのブルジョワ「団体」は消え、かわって「群集」にすぎないブルジョワが抬頭した。この新しいブルジョワは「資本の所有と利用」以外に関心をもたず、「金の情熱」のみに生きる享楽者である。かれらの社会的・国民的性格は、愛国心・宗教的感情・隣人愛の欠如である。このようなヴァロワのブルジョワに対する非難と軽蔑は、具体的にはとくに国際的な金融資本を対象にしていた。(15)

セルクルの「資本主義体制」の批判は、金権政治だけでなく、国家の肥大化にもむけられる。経済が政治に侵入する現代の「資本主義体制」では、産業資本家・金融資本家・大商人が独占体をつくって、国家を所有するか、あるいは自らの利益のために国家に圧力をかけるので、国家政治が経済的領域にまで及ぶようになる。かくして現代フランス国家は「爆発するまでにふくらんでいる、巨大で息切れのしている怪物である」と主張された。ベルトの国家にかんする議論は、このような理念のもとに現代民主主義国家を批判し、君主政国家へのサンディカリズムの適合を説く。ベルトは、サンディカリズムの主張する「国家の消滅」にかんして、サンディカリズムの本質は生産者有機体のなかから国家政治を取り除くことにある、と解釈することにより、サンディカリズムの反国家主義は、現代民主主義国家の肥大化だけに反抗すると説明する。また他方では、国家の肥大化は国家の弱体化を招くという理論によって、アクション・フランセーズの現代民主主義国家への反抗を解説する。つまりそこでは、肥大化することで、国益を擁護するための戦争などの機能が鈍化するというわけである。アクション・フランセーズは国家から贅肉をとり除き、それに新しい活力を与えるために分権化をもとめる。こうして、純粋な生産者団体をめざすサンディカリズムの理念は、制限された範囲内の強力な国家というアクション・フランセーズの理念に適合する、とベルトは論じた。(16)

セルクルは「資本主義体制」が抬頭する原因を、経済的領域にではなく、デモクラシーが準備する政治的条件にもとめる。すなわち、「デモクラシーは、政治と経済の双方において資本主義体制の確立を可能にした」[17]と。ヴァロワによれば、「力の本能に反社会的方向を与える民主主義的生活」[18]は、抑制なき物質主義を招来し、欲求のみに生きる人間をうみだした。また、このような人間の誕生と個人主義に基づく民主主義的な制度化は、国民を構成し、それを支える国民内部の多様な専門職業的・地域的な団体、および宗教・家族・労働等の国民生活の諸価値を破壊した。かくして、デモクラシーが「資本主義体制」を可能にしたとヴァロワは主張した。したがって、ここで述べている「資本主義体制」の批判は、㈠で論じた反リアリズム批判を前提にしており、結局のところ、楽観主義的な進歩観に基づく個人主義の批判、いいかえれば啓蒙思想の批判にいきつく。この点で、セルクルは、モーラスとアクション・フランセーズのデモクラシー批判を踏襲しているといえる。

㈣、以上のように、セルクルはデモクラシー体制を非難するが、まだそれに代わる明確なプログラムを準備する段階にまで達してはいない。とはいえ、ナショナリズムとサンディカリズムの合成を企てる過程で、セルクルに独自の国民社会主義的理念が提示されていることは確かである。これまでの議論から明らかなように、両者の合成ではナショナリズムに重心がおかれるとともに、サンディカリズムからは社会主義の人間主義的な要素が完全に抜きとられていた。セルクルの国民社会主義的理念は、もっとも基本的には次のラグランジュの言葉に要約されている。「われわれの意志は、異なる諸階級を維持しながら、われわれの家族・地域・階級の利益の名において、国際的な金権政治が課す資本主義体制にたいしてフランスの国民的連帯の存在を肯定し、その発現をひき起こすことにある」[19]。以下において、このことの内容を少し詳しくみておきたい。

ヴァロワの評価する現代サンディカリズムの基本理念は、労働者階級にそれ固有の階級意識を回復させて、それを

ひとつの階級として強固に組織すると同時に、資本家に「生産の組織者」というそれ本来の役割をはたさせることである。生産の領域において、両者は共通した職業的利害をもちながらも、被雇用者は労働時間の短縮を獲得しようとするし、雇用者は効果的な労働によって生産率を上げようとする、という対立関係でお互いに監視しあう。このような関係において、労働者は階級的に団結して、資本主義的搾取による労働条件と労働エネルギーの低下を阻止する。他方、経営者は、生産を効率的に組織するとともに技術的進歩をはたすように強制される。こうして両者の意志を越えたところで、国民生産の上昇と国民的エネルギーの保守が結果する、とヴァロワは論じた。[20]

サンディカリズムの意義は、生産の領域だけにあるわけではない。ヴァロワはさらに二つの意義を付け加える。ひとつは、諸階級に固有の名誉感と好戦的感情を再生させることである。これについては㈤で論じるつもりである。もうひとつは、資本家をそれ固有の仕事につかせることによって、国家の社会からの絶対的独立を保証することである。アクション・フランセーズと同様セルクルにおいても、国家と社会・経済領域の分離は分権主義の第一の鉄則である。国家への資本家の侵入を阻み、そして対立する諸階級が、祖国において連合して「国の力と偉大さに奉仕する」ためには、国家権威の独立が不可欠であり、そのためには強力な労働者組織の力で資本家を本来の役割にとどめておかねばならない、というわけである。[21]

セルクルは国家政体として君主政を選ぶ。セルクルの理論のなかで、伝統的秩序に属すといえるのは君主政だけである。君主政を選んだのは、国家の絶対的権威の保証や、国事に仕える専門職業の必要といった理論的な理由[22]の他に、モーラスのおかげで、君主政がフランス・ナショナリズムの核心としての否定しがたい力をナショナリストに及ぼしていた、という事情があったからであろう。

君主政の政治制度にかんしては、モーリス・マイレ（Maurice Mayrel）がセルクル内の議論で提出し、ヴァロワが論文に引用している定義[23]がうまく要約されている。それによれば、国王は、(1)国民の防御・一般的治安・対外的政治行

為、(2)金権政治からの国家の独立、(3)地域・サンディカ・コミューン等の諸共和国の設立と持続、の三つの要件を保証する。この国王の役割についてのセルクルの考え方は、モーラスの論じる君主政とほとんど同じといってよい。両者の考え方が異なるのは、国家内の諸共和国の存立様式と、それらと国家との関係についてである。セルクルは新学派の理念を発展させて、そうした共和国は自由と自律性をもち、それを守るために武装すべきだとする。そうなれば、諸共和国間および共和国と国家との間に対立が生じるが、セルクルは前者の場合だけでなく、後者の場合も敵対関係を是認する。すなわち、「国家の役割は混乱した秩序を再確立することである。しかし、それが労働者共和国にとって必要な暴力であるとしても、共和国は可能な限り王制国家を越えでて、あらゆる力をもってそれに対抗する」と。このように、一方において国家が介入しようと欲し、他方において共和国がそれを拒絶しようとするところに生じる「必然的対立」は、「均衡は敵対から生まれる」という理念によって正当化された。(24)

マイレの定義にはでてこないが、国王の役割と思えるものがもうひとつある。これまで考察したところから理解できるように、セルクルの理論のなかには、ファシズムの特徴をなす、強力な国家統制と階級協調に基づく一元的な国民組織の確立という理念はない。そこでは、右翼ナショナリズムの伝統である分権主義が、サンディカリズムを取り入れたことにより一層おし進められていた。しかし、ヴァロワの考えのなかには、明白に提示されてはいないものの「国民経済」の形成のための統合理論があった。(25) もともとヴァロワは、産業構造の近代化とそのための国家による生産の組織化が必要だと考えていたが、それにかんしてかれには、「極端な分業を要する現代の高度生産の条件」のもとでは、「労働配分のセンター、つまり生産を組織し、前もってその質と量を決定し、仕事を配分し、さまざまな生産者集団との関係を維持する責任をもったひとりないし数人」が必要とされるという認識があった。(26) 国民生産を組織する責任者が国家の頂点にあるとすれば、それは専門家の助言をうけた君主か、あるいは君主の直轄にあるなんらかの専門的集団である。だが、このようなテクノクラシー的な計画化は、伝統的な身分制をともなう君主政とは別の独

裁体制をとったほうがうまくはたされるであろう。そのためかこの時期のヴァロワには、積極的にこの理論を展開する姿勢はない。

㈤、ベルトはソレルの弟子として、セルクルのなかで英雄的美徳をもっとも尊重していたので、人道主義や平和主義にたいしては誰よりも鋭い非難を浴びせかけた。このことは、リビアとバルカンの戦争に際して、革命的サンディカリストがジョレスの議会社会主義に組してとった平和主義的態度を、ベルトが語調激しく糾弾する論文[27]にみてとることができる。ベルトは次のように論じる。即物的で功利的な全権政治に染まったブルジョワは、「好戦的で革命的な感情の覚醒と英雄的価値の再浮上は自らの支配を妨げる」と感じているので、「本能と利害から平和主義的」である。ブルジョワが対外戦争に参加するにしても、それは階級闘争を避け、権威を強め、労働運動を骨抜きにするためであり、そこに「好戦的国家」という観念はない。サンディカリストは戦争への抗議において、「真に労働者的な性格をもった感情よりも、はるかにブルジョワ的な性格をもった感情」に動かされている。かれらは「戦争が第一級の革命的出来事である」ことを忘れ、退廃したブルジョワと同様に「単純な物理的恐怖の叫び」をあげる。かれらは「老人のような生のための生への愛」しか感知できない。かれらの戦争批判は「純粋に感情的・トルストイ的・ブルジョワ平和主義的な観点」からなされている。サンディカリズム運動は、プロレタリアとブルジョワを再生させるためにブルジョワと闘うことよりも、「ブルジョワのもっとも退廃的なイデオロギーを取り入れることに熱心である」とベルトは論難した[28]。

ベルトにとって、戦争は国家のもっとも基本的な行為である。すなわち「国家、それは戦争である」[29]と。かれは、一八七〇年以後のドイツとフランスをみれば、力強い経済発展の基礎にあるのは戦争であることがわかると述べる。だが、ベルトの戦争への評価はそれにとどまらない。むしろかれにとって、生産者としての人間よりも、国民的伝統

と宗教的伝統にのっとって「もっとも神秘的な魂の力」にふれながら生きる人間のほうが重要である。そしてここでもまた、崇高・英雄主義・犠牲・理想・詩といった「人間の魂のなかで神聖なものは、すべて戦争に源泉をもつ」[30]とされた。かくしてベルトは、戦争が「道徳的崇高の源」[31]だと主張する。つまり、人類が愛と優しさにひたりきった時代において、戦争は「人間の沼地の腐った水を新しくするためにやってくる、強くて荒々しくて健康的な風」のように、人類に「男性的な感情」を思い出させるというわけである。[32]

セルクルにおいて、道徳的見地にたった好戦的主張は、国家のみならず社会的領域でも行なわれる。そこでは、国家の戦争行為がはたす役割はサンディカリズムの暴力がはたすと期待された。ヴァロワは次のように述べる。「純粋状態において、サンディカリズムはもっとも高貴な感情、すなわち名誉の感情と闘争の感情をよびさます。それは反平和主義的である。それは、平和主義的なデモクラシーが窒息させている好戦的感情を蘇生させる」。[33]ベルトはもっと直截に、サンディカリストという「新しい社会的エリート」が、「戦争の代理である労働と、好戦的美徳と同じほど高い労働者の美徳」を喚起することを述べる。[34]セルクルの人間にとって、労働の意味は「敵と戦う兵士」と同じ名誉感と崇高感をもつことにある。「戦いながら死ぬときと同じように、名誉感に満足して働きながら生きる」[35]ことがかれらのめざす生き方である。かれらはつねに「戦争によって栄光と不死の夢をみる」[36]ことだけを夢みる。

以上概観したように、セルクルの人間は、明日に好戦的価値と英雄的価値によって刻印された道徳主義を抱懐している。そしてかれらは、国民的観点にたった「人間主義」と社会的観点にたった「連帯主義」という、現代世界における二つの平和主義的な思想に敵対する。[37]この点からも、サンディカリズムとナショナリズムの同盟は当然主張される。すなわち、二つの運動は「金にたいする力と血の覚醒」によって、金権政治とそれに由来する平和主義を打倒し、英雄的美徳の勝利へと導かねばならない、と。[38]

(六)、これまでに明らかになったように、セルクルにおける正しい行動の理念も来たるべき社会の理念も、すべて闘争思想に支配されている。セルクルとモーラスとの根本的な思想の違いは、この点にある。セルクルの人間は、英雄的で好戦的な闘争的行動を賛美し、ブルジョワとプロレタリアが自律的な発展をとげるとともに闘争しあう社会を構想する。個人的な差異はあるにせよ、このような闘争思想がうまれたのは、アクション・フランセーズの「第二世代」の行動主義的志向が、ソレルの英雄主義的美徳の観念によって方向づけられ、同時に正当化されたことによる。セルクルの人間にとって、調和と平和を表象し、調和の美を賛えるような秩序思想は、眠りと無気力につかった退廃のしるしである。したがって、ラ・トゥールが唱え、モーラスが支持するような伝統的秩序の復古を受諾するわけにはいかない。モーラスの指導するアクション・フランセーズは、確かに多くの騒乱を起こしているが、それはモーラスのいう「秩序」を守るための手段にすぎない。それにたいして、セルクルにとっての暴力は、それ自体が内在的美徳をもつ目的である。このようにして、セルクルは温和な秩序思想や伝統的秩序を否定するが、しかし全面的に秩序を否定するわけではない。それではセルクルにとって秩序とは何であろうか。

ベルトはニーチェの用語を使って次のように論じる。「モーラスによってアポロン型精神を新たに肉化したアクション・フランセーズは、ソレルによってディオニュソス型精神を代表するサンディカリズムと結束することによって、新しく偉大な世紀を創出することができるであろう」[39]と。モーラスのアポロン型精神とは、秩序と美を表象する静態的・調和的な精神であり、ソレルのディオニュソス型精神とは、暴力と崇高を表象する動態的・破壊的な精神である。なぜモーラスの「秩序」とソレルの「暴力」の結合が必要かについて、ベルトは「アポロンがいなければディオニュソスは不条理と狂気のなかにおちこみ、デュオニュソスがいなければアポロンは形式主義におちこむ」[40]と述べる。ベルトの言から察するに、秩序とは暴力ないし闘争に付与される形式である。とすれば、闘争思想が貫徹するセルクルの政治・社会・経済の理論は、このような意味で「秩序」である。したがって、セルクルの構想する秩序は、現在に

も過去にもなく、未来にのみありうる秩序である。セルクルにおける闘争思想の帰結はこの点にあった。次の引用から理解できるように、セルクルの人間は現状を根本的に変革し、新しい秩序を創造する意志を明確にもっていた。

「われわれの運動は必然的に、フランス秩序の中心部である君主政を再興しようとする点において反革命的であると同時に、われわれに課せられている外国の社会秩序を破壊し、フランスの伝統に基づくが新しい形式をとる制度を創造しようとする点で革命的である。[41]」（ヴァロワ）

「伝統と革命との間には矛盾ではなく共同がある。革命は破壊するために破壊しようとするのではなく、歴史に忠実なものと文化の永久的枠組みとみなしうるものを保守しながら、人間の資本に何かを付け加えようとするのである。[42]」（ベルト）

またヴァロワは、その意志をプルードンに託して次のように述べる。

「プルードン、それは一九世紀において一八世紀の知的アナーキーを被った永久的フランスであり、……何世紀にもわたって規律されてきたこの永久的フランスの知性は、もはや無秩序しか知覚できない新しい世界において秩序を探求する。[43]」

肯定的に「革命」を主張していることは重要である。この時期まで、革命とは、もっぱら大革命の理念に基づく革命を意味していた。ナショナリズム運動が自ら「革命」を宣言したのは、バレス以来初めてのことであろう。モーラスのナショナリズムにおいては、国民的伝統が愛国主義の感情と結びつくことによって、生の力が獲得されると同時に、それの具体的慣行の保守ないし再興がめざされた。他方、セルクルにおいては、プルードンの象徴化にもみられるとおり、国民的伝統を「永久的」な観念に抽象化することによって、愛国主義と結びついたナショナリズムを現時点での活力の源泉に限定している。このことによって初めて、セルクルは「愛国主義の革命的正当化[44]」を語ることができた。

以上論じてきたことをもとにしてセルクルの思想を要約すると、次のようになる。すなわち、セルクルは、フランスの伝統の保守というナショナリズムの観念によって活力をえながら、闘争思想をもった国民社会主義的な秩序を創

造するために、現在における革命的闘争を鼓吹する、と。

(1) Henri Lagrange, L'œuvre de Sorel et le Cercle Proudhon: Précisions et prévisions, *Cahiers du Cercle Proudhon*, n° 3-4, 1912, p. 128.

(2) Pierre Galland, Proudhon et l'Ordre, *Cahiers du Cercle Proudhon*, n° 1, 1912, p. 31.

(3) J. Darville, Proudhon, *Cahiers du Cercle Proudhon*, n° 1, 1912, p. 10.

(4) G. Valois, Sorel et l'architecture sociale, *Cahiers du Cercle Proudhon*, n° 3-4, 1912, p. 11.

(5) P. Galland, *op. cit.*, p. 32.

(6) E. Berth, Le procès de la démocratie, *La Revue critique des idées et des livres*, n° 13, 1911, pp. 22-27.

(7) *Ibid.*, p. 28.

(8) E. Berth, *Les Nouveaux aspects du socialisme*, Marcel Rivière, 1908, pp. 32-35.

(9) *Ibid.*, pp. 35-38

(10) G. Valois, Nationalisme et syndicalisme, rapport présenté au IV° Congrès d'Action française (7 décembre 1911), in *L'Œuvre de Georges Valois*, cit., vol. 3, p. 551.

(11) G. Valois, *La Monarchie et la class ouvrière*, cit., p. 255.

(12) *Ibid.*, pp. 255-256.

(13) G. Valois, Notre première année, *op. cit.*, pp. 158-159.

(14) *Ibid.*, p. 159 (n. 1).

(15) G. Valois, La bourgeoisie capitaliste, *Cahiers du Cercle Proudhon*, n° 5-6, n.d., pp. 215-217.

(16) J. Darville, La monarchie et la class ouvrière, *Cahiers du Cercle Proudhon*, deuxième serie, n° 1, 1914, pp. 16-18.

(17) Déclaration, *op. cit.*, p. 1.

(18) G. Valois, La bourgeoisie capitaliste, *op. cit.*, p. 219.

(19) H. Lagrange, *op. cit.*, p. 131.

(20) G. Valois, Nationalisme et syndicalisme, *op. cit.*, pp. 548-551; Patriotes et révolutionnaires, rapport présenté au V° Congrès d'Action française (28 novembre 1912), in *L'Œuvre de Georges Valois*, cit., vol. 3, pp. 559-569.

(21) G. Valois, Nationalisme et syndicalisme, *op. cit.*, pp. 550-551; Patriotes et révolutionnaires, *op. cit.*, pp. 565-568.
(22) P. Galland, *op. cit.*, pp. 32-33; G. Valois, Patriotes et révolutionnaires, *op. cit.*, p. 565.
(23) G. Valois, Notre première année, *op. cit.*, pp. 161-163.
(24) *Ibid.*, p. 163.
(25) G. Valois, Sorel et l'architecture sociale, *op. cit.*, p. 111.
(26) G. Valois, La révolution sociale ou le roi, *op. cit.*, p. 30.
(27) J. Darville, Satellites de la Ploutocratie, *Cahiers du Cercle Proudhon*, n° 5-6, n.d., pp. 177-209.
(28) *Ibid.*, pp. 179, 189, 190, 206.
(29) *Ibid.*, p. 203.
(30) *Ibid.*, pp. 202-204.
(31) J. Darville, La monarchie et la class ouvrière, *op. cit.*, p. 14.
(32) E. Berth, *Les Méfaits des intellectuels*, Marcel Rivière, 1914, pp. 316, 329.
(33) G. Valois, Nationalisme et syndicalisme, *op. cit.*, p. 551.
(34) E. Berth, *Les Nouveaux aspects du socialisme*, cit., p. 4.
(35) Déclaration, *op. cit.*, p. 2.
(36) G. Valois, Pourquoi nous rattachons nos travaux à l'esprit proudhonien, *op. cit.*, p. 45.
(37) J. Darville, La monarchie et la class ouvrière, *op. cit.*, pp. 14-15.
(38) J. Darville, Satellites de la Ploutocratie, *op. cit.*, p. 209.
(39) E. Berth, *Les Méfaits des intellectuels*, cit., p. 327.
(40) *Ibid.*, p. 55.
(41) G. Valois, Pourquoi nous rattachons nos travaux à l'esprit proudhonien, *op. cit.*, p. 42.
(42) E. Berth, *Les Méfaits des intellectuels*, cit., p. 83.
(43) G. Valois, Pourquoi nous rattachons nos travaux à l'esprit proudhonien, *op. cit.*, p. 39.
(44) J. Darville, Satellites de la Ploutocratie, *op. cit.*, pp. 192-193.

# むすびにかえて

セルクルの活動はモーラスにとって疎ましいものであった。モーラスはもともとソレルの直観主義に嫌悪感をもっていたし、また、それをアクション・フランセーズにもちこもうとするヴァロワに好意をもっていなかった。[1] モーラスはヴァロワをかなり自由にさせていたが、それはおそらく、左翼に開かれた態度を示しておきたかったからであろう。とはいえ、ヴァロワをアクション・フランセーズの中枢におくことは断じてしなかった。一九一一年頃から、モーラスは組織と教義の両面において独裁的性格を明らかにし始め、以後アクション・フランセーズはモーラスの独裁体制にむかっていく。セルクルへの圧力は日増しに高まったが、それでもセルクルはアクション・フランセーズとの緊張関係を保ちつつ、一九一四年まで活動を続けた。[2] 第一次世界大戦が始まるとセルクルの若者の多くは出征し、セルクルが再開されることはなかった。

本稿では、保守主義的なアクション・フランセーズからどのようにして革命的なセルクルが生まれてきたのか、そして、その集団はどのようなファシズム的性格をもっていたかを論じてきた。Z・ステルネルが述べるように「最初のフランス・ファシズム〔フェソー〕は、事実上セルクル・プルードンの仕事を後追いした」[3] のかどうかは、本稿での考察の範囲外である。ここで指摘できることは、セルクルは、アクション・フランセーズから受けついだ超ナショナリズムと反デモクラシーの理念、独自の国民社会主義の構想、そしてとりわけ、暴力的行動の賛美と暴動主義的な革命志向において、ファシズム的性格をもっていたということだけである。ただ、一般的なファシズム・イデオロギーを前提にすると、セルクルの思想には、疑似民主的な選抜方法をとる「指導者原理」が決定的に欠落していたし、また全体主義的支配を否定する要素がかなりあったことは留意しておくべきであろう。最後に、セルクルに参加し、

後に「文学的ファシズム」を代表する作家となったドリュ・ラ・ロッシェル（Drieu La Rochell）の有名な一文を引用して、セルクルの意義を確認しておこう。

「ファシズム的雰囲気のいくつかの要素が、他のところにさきがけて、一九一三年頃のフランスにおいて合流していた。そこには、英雄主義と暴力への愛によって活気づけられた……若者たちがいた。……すでにナショナリズムと社会主義の結婚は企画されていた。そうだ、フランスにおいては、アクション・フランセーズのまわりに……一種のファシズムの星雲が存在した。それは困難も矛盾も恐れない若いファシズムだった。(4)」

(1) G. Valois, *D'un siècle à l'autre*, cit., pp. 244-245.

(2) G. Valois, *Bastile*, cit., pp. VII-XC. カトリック系の君主主義者によるセルクルの非難、およびラ・トゥールの後援の中止とリヴァンの脱退を機に、アクション・フランセーズは一九一四年にセルクルを公に攻撃した。この攻撃は、セルクルにとってアクション・フランセーズの支持を得るための重要人物であったラグランジュにむけて行なわれた。ラグランジュは、モーリス・ピュジョーとの争いにかんして恣意的な裁判にかけられ、かれをとりまく学生とともに排除された。E. Weber, *op. cit.*, pp. 75-76; P. Mazgaj, *op. cit.*, p. 192.

(3) Z. Sternhell, Anatomie d'un mouvement fasciste en France, *op. cit.*, p. 8.

(4) cité in Michel Winock, Une parable fasciste: Gilles de Drieu La Rochelle, *Le Mouvement social*, n° 80, 1972, p. 29.